

7 内痔核に対しサーキュラーステープラーを用いた環状粘膜切除術

牧野 成人 佐藤 賢治 (新潟厚生連佐渡
総合病院外科)
筒井 光廣

【目的】近年、内痔核に対するサーキュラーステープラーを用いた環状粘膜切除術(以下PPH法)が普及しつつある。当科での施行症例について検討した。

【対象】7ヶ月間に施行した6症例が対象。36～78歳までの男性でⅢ度の内痔核を認めた(外痔核の合併なし)。

【結果】手術時間が1時間以上の症例は4例で、その内2例は術中出血量が100g以上であった。術中に強い下腹部痛を認めた症例は1例のみ。術後疼痛が続いた2例を除き、4例は1週間以内に退院した。再発は認めていない。

【まとめ】内痔核に対するPPH法は、比較的手技が簡便で疼痛も少ない、早期の社会復帰を可能にする低侵襲手術になりうると考えられた。

8 直腸切除術を施行した複雑痔瘻の2症例

桑原 明史 山本 睦生
斉藤 有子・桑原 史郎
大谷 哲也 片柳 憲雄 (新潟市民病院)
斉藤 英樹 (外科)

【はじめに】

痔瘻の手術治療は再発のない根治性と肛門機能

を障害しないことが重要視されているが、複数回の痔瘻手術既往のある再発複雑痔瘻に対し、根治術として腹仙骨式直腸切断術を選択した2症例を経験した。

【症例】

1例目は、73歳男性で、肛門挙筋上複雑痔瘻に腰椎傍脊柱筋膿瘍で、すでに肛門機能はほぼ廃絶。2例目は、55歳男性で、肛門挙筋下複雑痔瘻で陰囊から臀部まで広範囲に進展。両症例ともクローン病、結核、糖尿病の既往なし。共に、肛門周囲の変形、長期罹患による悪性腫瘍合併の可能性、患者自身が再発のない根治術を希望された点を考慮し、術式を決定した。術後合併症なく、排尿機能も良好。

【結語】

直腸切断術により、仰臥位での睡眠、坐位での食事摂取が可能となり、排便に関しても人工肛門によりむしろ良好なQOLが得られた。

II. 特別講演

「肛門疾患・最近の診療」

社会保険中央総合病院大腸肛門病センター

岩垂 純一